

愛語コーナーについて

和やかな笑顔と優しい言葉を仏教では、和顔愛語（わげんあいご）といいます。人権に対する深い理解も、お互いに和やかな顔で向き合い、愛をこめて語り合うことから始まるものでしょう。このことから、本学の人権委員会が発行する会誌の誌名を『愛語』としています。

人権意識を高めることを目的に、広報誌『OTEMON PRESS』にも「愛語コーナー」を設け、継続的な啓発につとめる所存です。

（入試部 入試広報課）

いじめをなくすために

— 三者懇談会の取り組みから生まれたもの —

学生部長 高森 哉子

学生生活をサポートする「学生課」「学生相談室」「保健室」の三者が、この度「いじめをなくすために」と題したリーフレットを作成しました。これは各三部署における日々の学生サポート業務から、追手門学院大学のすべての学生にぜひ読んでもらいたいという思いで作成されたものです。

追手門学院大学に入学したすべての学生が充実した学生生活を送る、これは私たち教職員の最大の願いであり、日々の業務の指針となるものです。人の価値観が多様化する現代社会において、学生にとっては、時に悩みながらも、将来社会に活かすことのできる知識や円滑に社会生活を生き抜く術を学ぶことが、大学四年間の課題であるとも言えます。その学びの場は、正課教育以外に課外活動やアルバイト、友人関係など、多岐に亘ることでしょう。この貴重な四年間に、先輩後輩の上下関係や経済社会のしくみに触れた経験が、後の社会人として生きる力の基礎となるのですが、在学中に成人を迎える大学生には、何事にも自己責任を伴う自己決定が求められます。中には法律や社会の慣行に対する知識が不足しているがゆえに、思わぬ事件事故に巻き込まれる学生が多いのも事実です。

学生部は従来より、安全、快適、公正なキャンパスづくりを目指して、きめ細かなサポートに徹してきました。ここ三年間は特に、「学生課」「学生相談室」「保健室」の三者で月一度の懇談会を設け、緊密な連携を取り諸問題に対処してきました。また、学友会などの学生団体を通じて、機会を見つけては、人権を尊重することやいじめのない課外活動の要諦を説いてきました。しかしながら、いじめやハラスメントはいけなことだと頭では理解していても、自分のしていることがいじめであるとは気がつかなかったり、周囲の人達にいじめを防ぐための行動が伴っていないという現状が、残念ながら存在しています。学生がいじめで悩み苦しむことのないように、また無意識のうちに加害者になってしまい周囲を傷つける学生に注意喚起するためにも、今回作成したリーフレットには、「いじめとは?」「被害にあったとき」「自分の立ち位置」「加害者にならないために」「周囲でいじめのサインが見えたら」等を具体的に解説しました。また自己点検の項目も設けていますので、是非手にとって熟読してみてください。

さらに学生課では、2012年度も「弁護士による学生のための法律相談」を受け付けています。2011度は2010年度の約5倍、30回で77件の相談がありました。弁護士は、学生や一般には敷居の高い存在と感じられるかもしれませんが、しかし、買い物といった身近な日常生活の中でも法律行為は行われており、学生が悪質商法などトラブルに巻き込まれるケースも後を絶ちません。利用者からは「ちょっとした問題でも弁護士という専門家に相談することで解決の糸口が見つかった」という声も寄せられています。学生課への相談事案は様々ですが、中には、学則による加害者への処分を伴うものもあります。そうした深刻なケースは、もはや学生部だけでなく、各学部の教員、課外活動団体の顧問、学生自身の家庭など、関係各位の協力なしには、被害者への回復措置や、加害者に対する教育的指導を進めることはできません。関係各位ときめ細かな連携をとり、学生の皆さんにとって信頼でき安心して相談できる窓口であり続けるというのが、私たちの使命であり目標です。

冊子写真



司法書士

中井 美江さん
Nakai Mie

がないです。しかし僕は文系だからとあきらめず、自分を高めようと邁進した。今は、事務所経営の傍ら、建築士の資格スクールで非常勤ながら教鞭をとるまでになりました。何事もやればできるんですよ」と後輩へのエールで締めくくった。

就職氷河期の中、奮闘する就活生の後輩へ
資格を生かした仕事

中井美江さんと田中克茂さんは同級生。ともに経営学部経営学科で学んだ仲間、時には同じ授業をとり、お互い切磋琢磨しながら大学時代を過ごした。

偶然にも、現在二人は司法書士、一級建築士と、それぞれ資格を生かした仕事に就いている。会社という組織に縛られず、働き方の自由度が高い専門職の醍醐味や、取得までの道のりを聞いた。

中井美江さんは卒業後、住宅ローンの保証を商品として扱う企業に就職した。その商品は、顧客が組んだ住宅ローンの返済が不能となった場合、顧客に代わって金融機関に返済を行うもの。不動産登記を主な業務とする司法書士は、仕事で接する身近な存在だった。法律を扱う専門職に憧れを抱いて一念発起、2年間は会社勤めの傍ら終業後は資格スクールに通った。週2回の授業日以外も自宅やスクールで勉強した。難解な法律用語がすらすら読めるようになった段階で退職、1年後に念願が叶って合格した。

大学では経営学を専門とする山中雅夫教授ゼミに所属。卒業論文は「コーポレートガバナンス（企業統治）」をテーマに選び、会社設立や不動産登記などを徹底して学んだ。小さいころから法律に興味があり、一般教養科目も含めて法律に関する科目はすべて履修したという。追大生は、優しくて周囲に気配りができ温かみがある。私たちが以外にも資格を生かした仕事の卒業生がいたら、ぜひ交流したいですね。追大の卒業生には、共通の雰囲気を感じられるので安心できます」と、人脈づくりにも積極的だ。

谷崎合同事務所
司法書士：簡裁訴訟代理権認定司法書士
経営学部経営学科 1999年卒業

仕事に誇りをもって全力を尽くす

大学卒業後進路に悩み、思い立って一級建築士を目指した田中克茂さん。現在は京都府と滋賀県で一級建築士事務所を経営する。事務所の屋号は「株式会社アンビエント」。これは両親が経営していたブティックの名前を継いだものだ。

「多くの建築家は建物を『作品』と呼びます。僕には大きな違和感がある。作品は作者が主役。商品はお客さまが主役。徹底したお客さまのための建物づくり。それが僕の建築コンセプトです」と田中さんは思いを込める。

田中さんの両親は、神戸・北野で広く名の知れたブティックを営んでいた。小学生のころパブルが到来し、会社も急成長。高級ブティックとして、ファッション雑誌で紹介されるやいなや商品が飛ぶように売れ、テレビドラマでも使われるほどの人気ブランドに。経営者の父とデザイナーの母。田中さんは幼少から自然と家業を継ぐものだと思っており、父もまた跡継ぎの長男に経営の要諦を教え込もうと厳しく接した。大学入学直前に阪神・淡路大震災が起こり、状況は二変。被災地・神戸で高級ブティックは必要がなくなりました。就職活動しいや」両親からの言葉。田中さんが、人生の目標を失った瞬間だった。

一級建築士事務所 株式会社アンビエント 主宰
一級建築士
経営学部経営学科 1999年卒業

施主目線に立った家づくり

一級建築士

田中 克茂さん
Tanaka Katsushige

先輩にききたい
《資格取得編》

I want to hear "OB&OG's STORIES".
先輩
資格取得編
ききたい

